

# 空襲見ていた古木



近づくこと約5分はある幹に、1枚の表札が付いている。

「楠は見ていた」。その見出しに続いて、表札には概略で次のような説明が書かれている。

—昭和20(1945)

県庁と静岡市役所の間を通る御幸通りの歩道に、1本のクスノキの古木がある。街路樹の仲間でもなく、付近には静岡赤十字病院など高層ビルが林立しており、何となく居心地が悪そうに見える。

め、戦後の厳しい生活に追われていた市民に生きる力を与え、戦争のむごさと命の大切さを今に伝え続けている……。

太平洋戦争末期の昭和20年3月、東京、名古屋、大阪、神戸など日本の大都市は次々とアメリカ軍による大空襲で焦土と化した。市内に軍需工場もあった静岡市も標的にされ、同年6月20日未明の「静岡大空襲」となった。

マリアナ諸島から飛び立った100機以上のB29が約3時間にわたって1万発以上の焼夷弾を投下。死者約2千人、負傷者約5千人、焼失家屋約2万6千戸と言われるが、詳細は定か

でない。

静岡浅間神社裏山で静岡市街地を一望に見下ろす賤機山山頂に、「静岡大空襲」による犠牲者の慰霊塔がある。今年も6月23日、慰霊祭が行われる。あの日、クスノキが見ていた約2千の御霊は、今は約70万人が暮らし政令指定都市になった静岡市を見下ろしている。慰霊塔と並んで、あの空襲で事故死したB29搭乗員23人の慰霊碑もある。その脇に、米政府から贈られた鎮魂のハナミズキ。その青葉に梅雨の晴れ間の夏の太陽が照り付けていた。

(前静岡県監査委員・  
宣永久雄)



戦後の静岡市を見続けてきたクスノキ

|| 同市葵区、全日写真・中村明弘さん撮影